



第 155 号

—令和 7 年 12 月 20 日発行—

公益財団法人 古代学協会だより

古代学協会蔵『大内裏図考証』



大内裏図考証 全体

京都文化博物館では、ひろく京都に関わる文化資源データの蓄積と公開のため、京都文化次世代データセンター（仮称、以下、データセンター）と銘打った施設の構築を進めている。データセンターの活動は緒についたばかりではあるが、昨年度の実績として、古代学協会の協力のもと、協会蔵『大内裏図考証』（京都文化博物館寄託、上図）を対象とした近赤外線撮影の実証実験（右図）を行ったので、本稿ではその成果を報告したい。

（佐藤、次ページへ続く）



近赤外線透過光撮影時の様子

古代学協会蔵『大内裏図考証』の近赤外線撮影

京都文化博物館学芸員 佐藤稜介

『集古十種』とおぼしい反古紙が転用されている点である。これはつとに、藤本孝一氏が指摘するところであり（同「藤原定家・一条京極邸と『院宮及私第図』の復元」〈同『中世史料学叢論』

『大内裏図考証』は、近世後期の故実家である裏

松固禪（光世、元文元年（一七三六）〜文化元年（一八〇四））による、平安京および平安宮に対する考証を集成した書物である。固禪は、宝暦八年（一七五八）の宝暦事件に連座して蟄居の身となるが、謹慎の中で平安京研究に邁進し、ついには、蟄居が解かれたのちに、寛政度内裏の造営御用を拝命するに至ったほどの学究肌として知られる。寛政度内裏の竣工ののち、寛政九年（一七九七）には、固禪は『大内裏図考証』を朝廷の求めに応じて献上し、このときの献上本三〇巻五〇冊は、宮内庁書陵部に現在も伝えられている。

さて、協会本『大内裏図考証』は、正編三〇巻五五冊（献上本よりも五冊増）に「附録」八冊は

か計一四冊と絵図一巻が追加されていて、献上本とは異なる構成を持つ。固禪は、朝廷への献上ののちも、『大内裏図考証』の校訂を続けていたことが知られており、本品はその成果も含むものである（詫間直樹「裏松固禪の著作活動について―『大内裏図考証』の編修過程を中心として―」（『書陵部紀要』五五、二〇〇四年）。

あわせて注目される本品の特徴が、各冊の表紙・裏表紙の補強紙に、松平定信の周辺で出版された

思文閣出版、二〇〇九年、初出一九九五年）、本品を紹介した近年の展示でも、表紙裏反古に言及した解説がなされている（『いにしえが、好きっ！―近世好古図録の文化誌―』（国立歴史民俗博物館、二〇一三年）、『日本考古学の鼻祖 藤貞幹』（京都文化博物館、二〇一三年））。

本品の表紙裏反古に関する最大の疑問点は、全体のうち『集古十種』が占めるその割合であった。というのも、これまで言及された表紙裏反古は、表紙と見返しとの糊付けが離れてしまったためにたまたま目視が可能になったものであつて、それらは全体の半数に満たないのである。全体の半数弱では、データとしては心もとない。糊離れのない健全な表紙については、強い光に透かすことで裏反古を視認できないこともないが、精細な画像の取得は難しい。このような事情もあつて、表紙裏反古全体に対する調査はこれまで未着手であつた。

ここで話は冒頭のデータセンターに戻る。データセンターでの実証実験の一環として、OMデジタルソリューションズ株式会社の技術協力のもと、最新の機材を用いた近赤外線撮影が企画されたのである。近赤外線撮影が文化財撮影におい

て有用であり、とりわけ、墨付に対して顕著な反応を示すことは広く知られている。まさに、本品のような目視の難しい墨付を確認するには好適であつた。

協議の結果、安全かつ確実に表紙裏反古を撮影するために、今回は近赤外線透過光撮影を行うこととなった。具体的には、天板を透過面にした撮影台を自作して、台の下から近赤外線を投光し、IRフィルターを装着した上部のカメラで透過画像を取得した（表紙下）。

近赤外線透過光撮影によって実際に得られた画像が図1である。同アングルの可視光撮影である図2と比較しても、その明瞭度には格段の差がある。この画像によって、四三冊目の裏表紙には『集古十種』兵器類凡例（図3）の反古が貼られていると確かめられた（図3左頁が図1に一致）。この要領で、本品六九冊分の表紙・裏表紙、計一三八点のうち、表紙が見返しから外れておらず裏反古の目視が難しい六〇点を対象に近赤外線撮影を行い、更に、目視が可能なのとあわせて、裏反古全点の内容比定を試みたわけである。

その成果を概括したい。本品全体というと、表紙裏反古には手書きの反古は含まれておらず、墨付のある全てが何らかの刷物であると判明した。それでは、この刷物全てが『集古十種』であるかという点、『集古十種』と判断できるものは、少なくとも六八点を数え、全体の約半数、墨付の認められる一三三点のうちの六割を超えるという結果であつた（照合時の見落としも有り得るから、

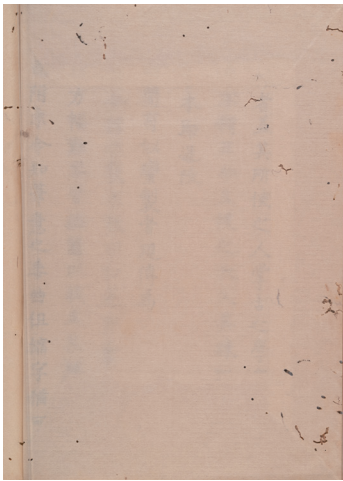


図2 大内裏図考証 43 ウ
可視光撮影

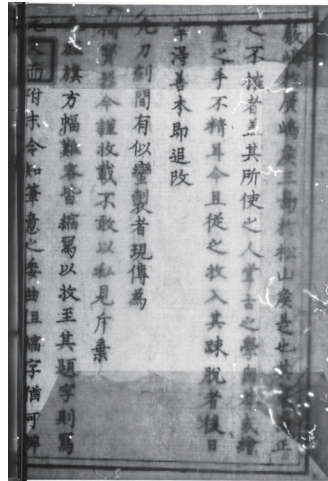


図1 大内裏図考証 43 ウ
近赤外線透過光撮影

実際はもう少し増えるのであろう。それらの『集古十種』を子細に見ると、ヤレ（損紙）が多数を占めたり、同一の版面が複数有ったりということが分かり、『集古十種』の印刷工房のごく近くで本品の表紙が整えられたとの推定が成り立つ。

墨付の六割超が『集古十種』と述べたが、それ以外は何者なのか。まず、『集古十種』には確実に存在しない版面が、本品の裏反古には含まれていることが分かった。例えば図4は、『集古十種』の表記によく似た「一」蔵源義家朝臣兜

図1の見出しを持つが、『集古十種』には同一の版面は無い。そこで、図4から判読できる文字情報を頼りにこの器物を探してみると、『集古十種』に先行する武器図録集である伊勢貞春『武器図説』（寛政十一年（一七九九）成立）に、銘文の情報や形状が一致する「義家朝臣冑図」が見いだせるのである（図5）。

このほかにも、『集古十種』に採録される器物の、より詳しい情報を持つ版面や、詳細は不明ながら裏反古に頻出する鐙矢の図（図6）などもあって、『集古十種』によく似た内容と体裁を持つ刷物の混入が確かめられる。推測の域を出ないものの、未知の版本、とも呼ぶ『集古十種』の続

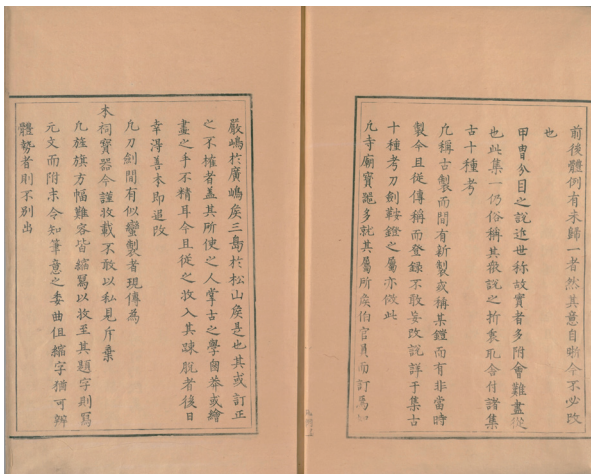


図3 集古十種 兵器類凡例

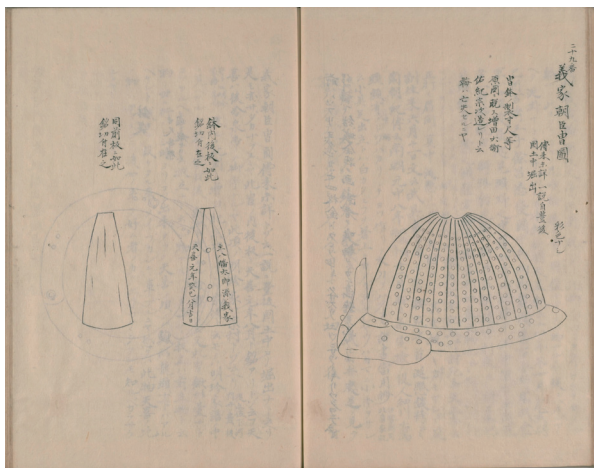


図5 武器図説巻六 義家朝臣冑圖
（図4と近似）



図4 大内裏図考証 30 オ
（集古十種にない図）

編のような図録集、あるいは、版木まで作られたものの『集古十種』本編には採用されなかった版が、本品の周辺で試作されたとも考えられよう。本品の表紙裏反古について筆者の力量で踏み込

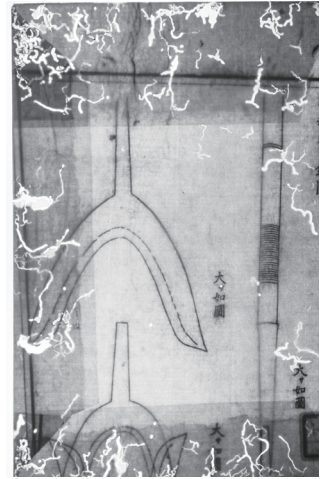


図6 大内裏図考証 61 ウ
(頻出する詳細不詳の図)

めたのは、ここまでである。筆者にとっては、未知であったこれらの版面が碩学の目に留まり、その来歴が明らかとなることを期待して、親本の特定に至らなかった裏反古はすべて、次の拙稿に掲載することとした(「京都文化次世代データセンター(仮称) 事業における近赤外線透過光撮影」・古代学協会本『大内裏図考証 表紙裏反古の『集古十種』』(京都文化博物館研究紀要『朱雀』第三七集(二〇二五年))。あわせてご参照いただけると幸いである。

【図版出典】

- 図3：国立国会図書館デジタルコレクション『集古十種』(<https://dl.ndl.go.jp/pid/2610505>、請求番号234—3)
- 図5：国立国会図書館デジタルコレクション『武器図説』(<https://dl.ndl.go.jp/pid/2607431>、請求番号848—113)

協会ニュース

▼「京都市平安京創生館」パネル展「山田邦和氏コレクションが語る京都の歴史 前篇『古代・中世篇』」京都市平安京創生館開館二〇周年記念特別展」の開催

古代学協会の山田邦和副理事長(同志社女子大学特任教授)は京都に生まれ育って歴史学・考古学を学ばれました。その中でも平安京・中世京都を中心とする京都の歴史を主要な研究テーマとし、研究を進める過程で多くの実物史料を収集してこられました。今回の特別展は、山田副理事長の収集史料を通じて見えてくる京都の歴史を紹介するものです。

会場：「古典の日記念京都市平安京創生館」(京都アスニー「京都市生涯学習総合センター」内。京都市中京区丸太町通七本松西入ル聚楽廻松下町九一。市バス「丸太町七本松」下車徒歩二分。JR嵯峨野線「円町」駅下車徒歩十分)

電話(〇七五)八二一七三二。

会期：令和七年十二月十九日(金)～令和八年六月八日(月)(休館日：火曜日(祝日の場合は翌日)及び年末年始)午前十時～午後五時。入館料無料。



日野資枝画賛「藤原定家像(部分)」江戸時代後期(山田邦和コレクション)

主催：京都市生涯学習総合センター・(公財)京都市生涯学習振興財団。

▼二〇二六年度連続講座開催の予告

来年度の歴史館共催連続講座のラインナップをお知らせします。内容詳細および申込方法は二月頃協会ウェブサイトに、チラシにてお知らせの予定。テーマ「摂関盛期から院政期へ」

五月九日(土) 河添房江(東京学芸大学名誉教授)

「王朝貴族を飾った唐物」

六月二日(日) 吉川真司(協会参与・京都大学名誉教授)

「摂関政治の実像」

七月四日(土) 藤谷壽(協合理事長・同志社女子大学名誉教授)

「後白河院と平清盛」(院御所法住寺殿)

八月三十日(日) 國賀由美子(協会委員研究員・元大谷大学教授)

「院政期の絵画」(平家納経・絵巻物を中心に)

九月十三日(日) 山田邦和(協会副理事長・同志社女子大学特任教授)

「保元・平治の乱と平安京」

十月三日(土) 長村祥知(富山大学准教授)

「源頼朝の登場」

十一月七日(土) 小林一彦(京都産業大学教授)

「新古今の王朝と院政期」

十二月十九日(土) 荒木浩(国際日本文化研究センター名誉教授)

「時代の変転」『方丈記』の世界」

※タイトルは変更する場合があります。

題名「土車」について

『六角堂縁起』によると、当協会の所在地である京都市三条高倉一帯は、その昔、愛宕(あたご)郡折田郷(くしたのこう)土車ノ里(つちぐるまのさと)と呼ばれていたという。今から千二百年あまりも昔のこと、この地名は桓武天皇の平安遷都以来なくなっていました。また洞曉上人の事蹟を記した『都廬包(みやこのつと)』にも、「鳥丸三条の辺を土車と称する」云々の言葉が見え、これが謡曲『土車』の題名にもなったといわれている。昭和五二年創刊のおり、角田文衛により名付けられた。

馬見古墳群と「葛城氏」、その一九五〇年代

元奈良県立橿原考古学研究所 今尾文昭

岸俊男は、飛鳥・奈良時代の古代史研究者に留まらず考古学の古墳時代研究を志す者にも多大の影響を与えた。一九五九年に発表された「大和の豪族」(『世界考古学大系』三 日本Ⅲ 古墳時代、平凡社)の見開きとなるページの真ん中に組み込まれた掲載図は、左に右に比較するに利便があり、今日でもこの掲載図を引いた展覧会図録に接することがある。一九七五年に第二版が出るが、古墳時代を学び始めた私も、即座に入手したことを覚えている。

奈良盆地の①東北に「和珥」、②西・南に大臣系の「葛城」、「平群」、「巨勢」、「蘇我」、③東南に「皇室」と近侍する大連系の「大伴」、「物部」、伴造の「中臣」の三グループがあり、それぞれ佐紀古墳群と馬見古墳群、「磯城古墳群」の三つの大古墳群に対応すると指摘した。そして①「孝昭記」のアメオシタラシヒコを同祖とする和珥氏の同族系譜の成立を「舒明」「皇極」頃の七世紀前半、②「孝元記」にある建内(武内)宿禰の後裔氏族系譜は、和珥氏への対抗上の作為として蘇我氏が関与して創り上げた擬制的同祖同族関係の系譜かとした。作成は七世紀だが、古墳群の存在によりその前史となる四、五世紀

史における豪族と「皇族」の関係を慎重な記述と共に掲載図において鮮やかに示した。

先立つ一九五六年に発表された井上光貞「帝紀からみた葛城氏」(『古事記大成』歴史考古篇、のち「日本古代国家の研究」岩波書店、一九六五年所収)は、当然のことに岸

の所論に影響している。井上論文は「倭の五王」以降の「記紀」の系譜関連記事に新たな信頼性を与えた論文と評価されて、古墳時代前期末葉から中期にあたる四、五世紀史およびそれ以降の研究の基本論文となった。

を用いて照応させてみせた。ここに「応神」や「仁徳」以降の系譜に信頼性がおけるならば、古市古墳群や百舌鳥古墳群の超大型前方後円墳として築かれたと目される大王墓も、「帝紀」(また、原帝紀)を経て『古事記』『日本書紀』に陵所、陵名が反映しているということにつながる。そして、自説を支える葛城氏が存在した根

本論文となった。

「神功紀」所引の『百済記』にある沙至比跪と武内宿禰の子のうちの葛城長江曾都毘古を同一人物とし、ほぼ実在人物としたことを定点として葛城氏系譜上の人物と記紀系譜上の歴代天皇を、海外史料

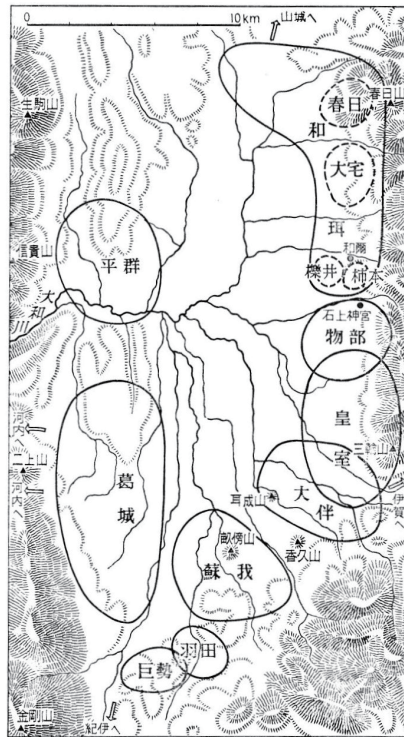


図1 大和の豪族分布図(岸 1959年)

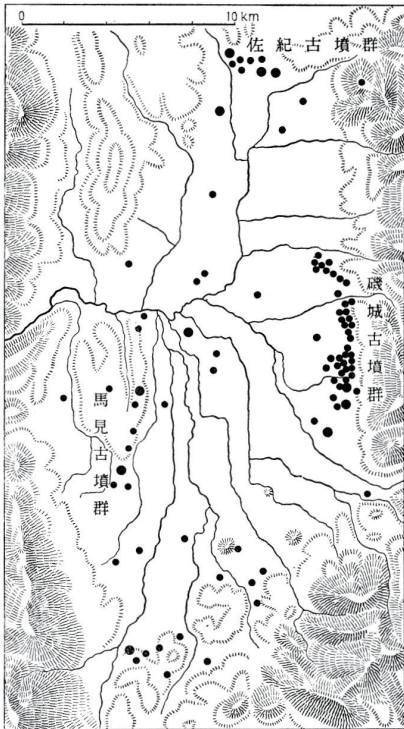


図2 大和の前方後円墳分布図(岸 1959年)



図3 馬見古墳群と葛城（手前に築山古墳、中央奥に室）撮影：梅原章一

拠を奈良盆地西南部の馬見古墳群の消長に求めた。実はここに森浩一の馬見古墳群に対する考古学上の評価（森浩一「畿内」後藤守一編『日本考古学講座』五 古墳時代 河出書房、一九五五年）が採られた。森は、馬見古墳群の佐味田宝塚古墳と新山古墳を古墳時代中期の早い時期におき、中期の隆盛を築山古墳にみた。馬見古墳群に陵墓が伝えられていないことや、六世紀中ごろになって突然に古墳群形成が断絶することを「記紀」の葛城氏の盛衰にあてた。

つまり馬見古墳群を葛城氏の歴代族長の経営になると示唆したのである。

そもそも森の根拠は「葛城」が「大和」に對比される独立小国として七世紀までであるとした点にあり、ここは井上の国造制論（「国造制の成立」『史学雑誌』六〇―一一、一九五一年のち『井上光貞著作集』四 岩波書店、一九八五年所収）を踏まえたものであった。当時の古代史と考古学の立論上の整合となる。

井上の所論は、一九七〇年代前半に白石太一郎によって補強される。葛城氏の本拠地は馬見古墳群の営為がある律令期の葛下郡、広瀬郡ではなく、葛城山麓の御所市（葛上郡）から旧新庄町（現、葛城市。忍海郡となる）の付近に求めるべきだとした上で、旧葛城国の版図のなかで最大の前方後円墳、室宮山古墳（墳長二三メートル）は馬見古墳群ではなく、馬見古墳群の営為に葛城氏（葛城臣）を充てることは出来ないとした。さらには顕宗陵と武烈陵の陵名にある「傍丘」は馬見丘陵のことではないかとする（白石太一郎「第四章考察 第四節馬見古墳群について」奈良県立橿原考古学研究所編『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第二十九冊、一九七四年）。確かに森が馬見古墳群に陵墓がないとしたのは、現治定の「顕宗陵」「武烈陵」の陵所（『延喜式』では葛下郡）を指すもので、馬見古墳群の狐井塚古墳、築山古墳に考定された過去が近世にあることからしても、白石の指摘どおりで

ある。

そして、建内系譜の原形の成立と室宮山古墳の存在、後背丘陵上の群集墳である巨勢山古墳群の形成に擬制的な同祖同族関係性があるとみて、室宮山古墳の造営時期と重なる葛城襲津彦を被葬者とすることを躊躇なく主張する。（白石太一郎「大型古墳と群集墳」『考古学論攷』第二冊 奈良県立橿原考古学研究所、一九七三年）。

かくして、一九五〇年代後半を起点にした考古学成果を取り入れた新たな大型前方後円墳の四、五世紀史の被葬者論が成立した。

しかし、一九九〇年代以降の古墳の編年研究の進捗により、佐味田宝塚古墳や新山古墳は前期後葉、築山古墳は中期初葉、とりわけ中期古墳とみられた築山古墳（墳長二二〇メートル）が前期末葉、大古墳群としての終焉は北群の川合大塚山古墳の周辺を含んでの評価となれば中期中葉以降となる。他の大古墳群に比して早いが、大概、五世紀後半で軌を一にした状況とみる。「記紀」の葛城氏の消長と馬見古墳群を重ねることに無理があることが明らかになって来た。

一方、室宮山古墳の被葬者を葛城襲津彦であると、白石が断じて以来、古墳時代研究者の多くが支持して来たが、史料上の伝承では建内宿禰が被葬者と見込まれる。タケノウチノスクネは大系譜の最初に位置する。「孝元記」に子となる七人の男子が、それぞれ二十七氏の「祖」

となるが、「允恭紀」にそのうちの葛城襲津彦の孫（「雄略紀」では子）の玉田宿禰が、反正天皇の殯宮への奉仕を懈怠した責を問われた際に「祖」の「武内宿禰の墓域」に逃げ隠れたとある。非実在とみられる人物とは言え、墓の伝承が備わっていた。『帝王編年記』の仁徳天皇七十八年条には、武内宿禰の墓が「室破賀墓」とあり、室宮山古墳（室大墓古墳）を指すと考えるのが一般的である。一方、馬見古墳群の築山古墳、巢山古墳、新木山古墳、川合大塚山古墳に武内宿禰墓の伝承はない。

加えて平林章仁は『紀氏家牒』（逸文）をもとに武内宿禰の家が「大倭国葛城県五处理」（奈良県御所市）、墓が玉田宿禰の本拠地「葛城県玉手里」（御所市玉手）付近に存在すると伝えており、付近に「室里」（御所市室）が含まれることから、武内宿禰の墓が室宮山古墳に伝承されたことを指摘している（平林彰仁「蘇我氏と葛城（覚書）」横田健一編『日本書紀研究』第二十一冊 塙書房、一九九七年）。玉手も室も令制下の葛上郡にあり、馬見丘陵からは離れた御所市中心部の東南方、南方に位置する。要はウジの大系譜の最初に位置づけた「祖」となる人物の墓を居住地に近在し、一帯となる土地（この場合は葛城）に伝承したというわけだが、それをどの時期に求めるか、伝承が固有の古墳（この場合は室宮山古墳）に託されるのはいつかという点が問題となる。

「葛城」、「平群」、「巨勢」、「波多」、「蘇我」



図4 室宮山古墳（南から）撮影・筆者

の擬制的な同祖同族関係の設定要因が生じた際に伝承をもとに地域で顕著な大型前方後円墳、室宮山古墳に大系譜上の「祖」である武内宿禰の墓を仮託したとみるが、岸が示唆した蘇我氏関与の七世紀前半のウジ系譜作成がその契機となったか。そうだとすると、白石説の主張に即すと実在の葛城襲津彦の墓が、大系譜の成立により伝説の建内宿禰墓に変換したということになるが、否定も肯定も現時点では出来ない。

今まで述べたように、井上は従来の「記紀」の史料批判を海外史料によって克服し、その実態を古墳および古墳群の存在から可視化するこ

とを試みた。葛城氏および「皇統譜」をみえるようにしたわけである。しかし、七十年後の今日、再考が求められよう。

①馬見古墳群の消長と史料上の葛城氏の盛衰が必ずしも合致しないこと、②馬見古墳群の古墳に律令期陵墓が仮託された可能性があること、③従来は葛城の本拠地で最初に築かれた大型前方後円墳と考えていた室宮山古墳だが、北に對置する丘陵先端に営まれた築山古墳が、埴輪の編年研究からは明らかに先行する。すなわち、建内宿禰系譜上の「祖」となる「武内宿禰墓」伝承が室宮山古墳に付与されており、考古学上の築造順序と史料上にまとまる系譜に矛盾があること、さらに④『百濟記』を含む百濟三書については、『日本書紀』編纂史料として八世紀初頭段階に「百濟本位の書き方」をした原史料を用いて、「日本に対する迎合的態度」により編纂した百濟系氏族の立場とのせめぎ合いが成立事情に介在したことが指摘されており、海外文献であることを前提に『日本書紀』の潤色や改竄を排除できる史料とはいえなくなっていること（仁藤敦史『日本書紀』編纂史料としての百濟三書、『国立歴史民俗博物館研究報告』第一四九集、二〇一五年）。

一九五〇年代に確立されたかにみえた葛城氏と、それに併行する「応神」「仁徳」の系譜の四、五世紀史における史実性を改めて問わなければならぬ。なお近年、葛城襲津彦の世々にわたる「記紀」での活躍を地域首長である複数人物

の人格が反映したものとし、馬見古墳群を含めた大型前方後円墳の編年に合わせて、三分解してそれぞれの被葬者に充当するといった論調に接するが、先学に拠る学史の検証を重んじる立場からはこれには与しない。

実証史学の古代史の井上光貞が、「帝紀」に反映する系譜を一九五〇年代に証明しようとした時代背景には、「記紀」や『風土記』『萬葉集』などの物語を階級的視点で筆録されていたことへの対抗があったのではないか。一九五三年に発刊された藤間生大『日本武尊』（創元社）は、群小の「県主階級」が理想とする英雄、ヤマトタケルを用いて「強大豪族」への抵抗史、国家成立過程を生き生きと描いた。今日の歴史学からは乖離があるが「英雄的叙事詩的古代」のビジョンに則った著作であった。藤間自身は井上光貞の「国造制」（一九五一年）、林屋辰三郎の「継体・欽明朝の内乱」（一九五二年）、近藤義郎の「群集墳」（一九五二年）の研究といった「戦後古代史研究の第二派の創造的な業績」を使用できたことで執筆が可能になったと述懐している（藤間生大著、編者磯前順一・山本昭宏「日本史・東アジア史・世界史について語る」『希望の歴史学』ペリカン社、二〇一八年）。

研究視点や方法、目的の根本的な相違はあるが、これら諸研究がまた同時代になされていたわけである。定説への疑義、批判と共に戦後史における「一九五〇年代」を改めて問う必要をここに感じる次第である。

協会事業の報告

◆第十二回角田文衛古代学奨励賞授賞式 ならびに受賞記念講演会

十一月一日（土）第十二回角田文衛古代学奨励賞授賞式ならびに、記念講演会を開催致しました。会場は、同志社女子大学今出川キャンパス ジェームズ館二階。



ス ジェームズ館二階。



文化編集長より、選考経過報告がありました。

越川氏の受賞論文は、「平安時代中・後期の牛飼童と貴族社会」（『古代文化』第七六巻第二号掲載、二〇二四年九月）。本論文は、平安時代の牛飼童の検討を通じて、当時の一般民衆の存在に着目し、史料の少ない中で精緻な研究を

まずはじめに

臈谷壽理理事長より、越川真人氏（東京大学史料編纂所古代史料部門 学術専門員）へ表彰状並びに記念品の授与が行われました。次に横大路綾子古代文化編集主任より花束の贈呈が行われ、

次いで山田邦和副理事長・古代



の今後のご研究の進展に、いささかなりとも寄与することを願います。

行なったことが高く評価されました。引き続き、越川氏の記念講演会「牛飼と牛車から読み解く平安京の都市社会」へ移りました。その後、今回のテーマに関連して野口孝子先生（古代学協会客員研究員）の「関寺の牛仏―牛に化身する仏、牛仏への貴族たちの思い」。講演後両講師と山田副理事長によるディスカッションが行われました。参加者三十名。

本賞が、越川氏

発行者

公益財団法人古代学協会

京都市中京区三条通高倉西入ル

菱屋町四八

電話〇七五・二五二・三〇〇〇

令和七年十二月二十日

公益財団法人古代学協会 企画部

発行日

編集